

論文の和文要旨

論文題目	戦後知識の可能性—加藤周一の思想における連続性と非連続性
------	------------------------------

氏名	マヤ・ヴォドピヴェツ Maja VODOPIVEC
----	------------------------------

一般的に論じられているように、日本における戦後思想の出発点はアジア・太平洋戦争とその敗北の経験に根ざしている。戦後思想はまず戦争の反省から始まり、近代日本の特殊性の考察、つまり国体や天皇制国家、あるいは帝国主義的膨張の構造的分析として、さらにはそうした現状を変革の主体、あるいは近代的自我としての主体性の探求として発展してきたものだった。

本論文で中心적으로とりあげる加藤周一は、戦後知識人の中においてもとりわけ西洋的近代を志向したものの代表として評される人物である。彼は西洋的な近代性なるものを国民的アイデンティティの探求する過程として捉え、戦前の日本の軍国主義化を防ぐことができなかつたのは、西洋的ヒューマニズムを担う民主主義的な主体が、日本国民において確立され得なかつた為であると考えた。

彼は戦後天皇制的権威主義の構造を批判した最初の知識人の1人である。こうした姿勢は戦時体制の非合理主義への批判とともに、西洋民主主義を批判し、大東亜共栄圏を正当化することに腐心した戦間期の知識人たちの戦争協力への批判として表れであったのである。

このような彼のより強固な個性を実現する「近代性」への探求は、彼にとって世界を旅することによって現実味を帯びていくことになる。本論文ではこうした旅の経験が加藤の「周辺」的立場や「距離からの視点」といった理論と共に「中間」雑種文化理論にあわれている不完全な近代性の場にも影響を与えていることを論じる。この雑種性の比喩は、日本の文化と国際関係の位相の特殊性を説明するために論じられてきたものである。

加藤の日本とアジアに対する態度は60年代末頃から国内状況、および国際状況の転換に応じて変化していった。特に冷戦の終結は、加藤の日本的ナショナルアイデンティティに対する立場を変化させた。彼はここで、アジアという視点抜きには日本なるものを考察するは出来ないというスタンスをとるようになるのである。それまでの加藤は、西洋近代主義の知識人として運動の局面ではたびたび批判されてきた人物でもあった。たとえば55年体制が確立された翌年

の56年、加藤は『雑種文化』を出版しているが、この加藤の日本文化論は、まさに朝鮮戦争休戦後の極東の緊張関係から日本だけが高度経済成長へと進み始める時代状況において、日本を文化的にアジアから切り離す言説として機能してしまうとして、批判されることになるわけである。こうした批判は60年安保闘争と68年の学生反乱において最高潮に達する事になる。

このような加藤の日本的ナショナリティに対する感覚は国際関係、とりわけ日本と「西洋」との関係によって規定されていたところが多い。安保闘争以前の彼は親・西洋的感情もった、保守思想に対抗するリベラルで、いわゆる進歩的知識人であった（これは雑種文化論に見て取ることができる）。そしてこうした傾向は60年代末に書かれた『日本文学史序説』においても明確なかたちで読み取ることができる。たとえばこの作品においても、加藤は日本におけるマイノリティの文学、または「在日」文学の作者に注意を払う事はないのである。ここでも加藤にとっての対照項は「西洋」であったのである。こうした加藤のナショナルアイデンティティに関わる思想布置が変化していくひとつ大きな契機が冷戦の終結であったといつてよい。冷戦の終結とともに加藤は、戦後の五十年間を総括して、変わってきた対外関係の中では日本の未来を考察した。そこには例えば広島、長崎、NPT(核拡散防止条約)における不平等の問題、または「国際貢献」の名の下に行なわれる一種の偽善を暴き出す様なものも含まれている。さらには90年代に入ると歴史修正主義に関する議論にも積極的に関わるようになった。加藤はそれまで一切といていいほど政治的運動にかかわることはなかったが（彼自身そうした態度を「高見の見物」の見物と表現している）、初めて積極的なスタンスをとることになるのである。こうした彼の動向は、もともとの親西欧的な心情からアジアへとその関心が移っているとみることができるのである。

彼の死の4年前（2004年）、加藤は呼びかけ人として九条の会を立ちあげた。彼は憲法九条を、現実から乖離したユートピア的理想ではなく、むしろ日本人に国民的アイデンティティの一部であり、日本がこれから世界において平和的に生存するために必要なものとして捉えている。こうした彼のスタンスの変化は、彼の視点が西洋ではなく日本の侵略戦争によって深い傷跡を残したアジアの近隣諸国へと移っていったことと関係している。加藤は日本の敗戦と戦後の数年間を解放と表現している。加藤にとって憲法九条とはこうした解放の一つの成果であり、この点を見ると加藤の視点は変わっていないといえる。加藤が示したものは、日本の生存は憲法九条を護持するところに懸かっているのである。

本論は加藤周一の思想と行動を、近代性と伝統文化、知識人の役割と戦争責任、ナショナリズムと冷戦後現在に至るテロリズム、軍事介入、核兵器といっ

た問題との複雑な関係から分析していくが、こうした考察を通じ、日本と西洋との関係性が変化することに従って、加藤の論じるリベリズムがナショナリズムからインターナショナリズムへ、そして反アジアから親アジア的感情へと転換していくことを示すものである。しかしながら本論は加藤周一の思想について何らかの審判を下すようなことを目的にしているのではなく、むしろその転換が起こった歴史的コンテクストを解明する事を目的している。そして、この彼の変化こそ、加藤周一の思想が生き残る可能性であり、戦後的知が残した最良の人間的な価値であるということを明らかにしたい。